OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	卒業生による全学共通教育ならびに大学教育に関する意識調査
Author(s)	齊藤, 貴浩; 望月, 太郎; 早田, 幸政 他
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2011, 7, p. 49-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8580
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『大阪大学大学教育実践センター紀要』第7号（2010），pp.49-68

【調査報告】

卒業生による全学共通教育ならびに大学教育に関する意識調査

齊藤　貴浩・望月　太郎・早田　幸政・中村　征樹・松河　秀哉

A Survey of Alumni's Awareness of University Education and General Education in Osaka University

Takahiro SAITO, Taro MOCHIZUKI, Yukimasa HAYATA, Masaki NAKAMURA, Hideya MATSUKAWA

Today, it is essential to consider what added values our university can provide to its alumni through comprehensive educational curriculums in liberal arts and specialized fields. That is, it is imminently necessary to critically review our university's education from the perspective of educational and learning results. A way to examine learning outcomes directly is to get feedback from our alumni about what they have learned from the university's curriculums. The Institute for Higher Education Research and Practice surveyed alumni regarding their views during academic year 2006. The environment surrounding the university's education, and our university itself, have been changing since that time and it is necessary to check the results of our educational curriculums at regular intervals to ensure future improvement. This study seeks to reexamine the role our general education curriculums in all faculties have played by obtaining and analyzing our alumni's feedback to consider how to provide education in the future.

1. はじめに

今日の大学は、「教養」と「専門」を通じた系統的な教育課程を通じ、卒業生にどのような付加価値を与えることができたか、換言すれば、「教育成果」の視点から大学教育の在り方を捉え直すことが求められている。教育成果を把握するためにより直接的な方法は、卒業生に対して在学時に経験した大学教育の内容を再考してもらうことであり、卒業生調査は教育の改善・改革を果たしていく上で今や必須不可欠である。大学教育実践センターでは、平成18年度に卒業生アンケートを実施した。しかし、それから3年が経過し、大学を取り巻く環境も、また大学そのものも変わってきており、定期的に大学の教育の成果を検討し、今後の改善に活かすことが必要とされている。

本調査研究は、卒業生の意見を通じて、本学、とりわけ全学共通教育（いわゆる一般教育）がこれまで担ってきた役割を再確認するとともに、その一層の改善の方途を模索することにある。学部教育の成果について確認し、今後の教育の在り方について検討するための資料となることが期待される。

2. 方法

本アンケートは大阪大学のすべての学部卒業生を対象に行うものである。そこで、大阪大学のすべての教授職にある教員から、当該教員の研究室、もしくは講座や教室の最近5年間（平成16年度から平成20年度）の卒業生に、アンケートへの回答を依頼するという方法をとった。送付する卒業生の数には制限を設けなかったが、「もしも回付数を区切る必要がある場合には、大学院生2～3名程度、社会人2～3名程度、全体で約5名程度の卒業生を目安」とした。実施時期は平成21年12月であった。

すべての連絡手段は電子メールであり、卒業生に対する依頼状と質問票を添付ファイルで教員に送り、それを卒業生に転送してもらった。卒業生には、以下の2つの方法のいずれかを用いて質問紙に回答するよう依頼した。

（方法1）電子メールに記載されたwebサイトにアクセスして回答する。

（方法2）電子メールで送ったファイルに回答を入力し、添付ファイルで送信する。

なお、回答は無記名とし、個人を特定しない旨を明記

した。

回答数は、webでの回答が118（有効サンプル数117)、添付ファイルでの回答が10であり、合計127の有効な回答が得られた。上記のような調査設計であり、また教員が質問紙を卒業生に送ったかどうかの確認も取れないために正確な回収率は不明である。しかし、メールを送った教員が841であることから、もしもメールを受けた教員全員が5名の卒業生に回答を依頼したとすると、回収率はおよそ3％である。5年間の全卒業生数から換算すると、サンプルの割合は1％に満たないが、追跡の難しい卒業生の調査ではこの程度が限界であろう。

質問紙の内容は、卒業生個人に関する内容と、大学の教育で身につけた素養や能力、さらに自由記述として、全学共通教育の良い授業と悪い授業、卒業生の立場から見ての大阪大学全学共通教育の方策である（参考資料1)。次のセクションでは、これらの調査結果について単純集計を元に考察を行う。

3. 結果

3.1 回答者の属性について

「学部卒業年」（図1）について、回答者の割合が最も多かったのは平成18年度卒業生で、全体の22.8％を占めていた。以下、平成21年度卒業生（21.3％)、平成20年度卒業生（18.1％）の順である。なお、回答者全体の89.0％が、平成17年以降の卒業生であった。

「卒業学部」（図2)については、工学部が40.2％でもっとも多く、これに基礎工学部18.9％、理学部17.3％、文学部9.4％が続いた。全体の76.4％が、工・基礎工・理の各学部からの回答であった。

「学部卒業時の進路（大学院進学状況)」（図3）に関しては、「大阪大学・大阪外国語大学に進学」80.3％、それ以外の「大学院に進学」2.4％、「進学しなかった」16.5％であった。なお、回答が不明である者1名は、他の設問で現在大学院生（研究生を含む）と回答しており、その者も含めれば、大学院に進学した学部卒業生の割合は、全回答者の83.5％となる。

「現在の学歴」についての質問（図4）は基本的に大学院に進学した者を対象とした設問であり、その回答に「大学院に進学しなかった」と回答した者の学位を「学士」として集計を行った。その結果、127人の全回答者の有する学位を確認できた。全体から見ると、回答者のうち、「学士」が46.5％、「修士」が50.4％、「博士」が3.1％であった。「専門職学位」を回答する者もいたが、卒業学部等から判断し、他の学位に割り振っている。

回答者が有する学位だけでは、その回答者が現在も大学にいるのか、社会に出ているのかが分からない。また、現在の職だけでは、回答者がどこまで学業を修めたのかが分からない。そこで、これらのデータを基に、回答者の学部卒業後の進路と現在について明らかにした(図5)。回答者のうち、「修士課程を修了」が44.1％と多くを占めている。「修士課程に在学中」が29.1％、「学部を卒業」が16.5%と続く。そして「博士後期課程に在学中」が7.1%、「博士後期課程修了」が3.1％となった。

「現在の職」（図6）については、比率の最も高かったのが、「企業」50.4％であり、次いで「大学院に在籍（研究生等を含む)」34.6％であった。約半数の回答が企業への就職者、そして残りの大半が大学院生ということになる。以下、「官公庁（公務員)」と「医療機関（研修医を含む)」が3.9％、「大学・研究機関」が1.6％という順となった。

次に「就職者の職種」（図7）について質問した結果であるが、大学院に通学しているとする者が「研究職・開発職」を回答している場合は、本問が大学から離れて職を得ている者に職種を尋ねることを想定した設問であるため、サンプルから外した。そのため、大学院に学生としての身分でありながら職を得ていたり、また企業から大学院生として派遣されたりしている場合には、本問の回答から落ちている可能性がある。回答を寄せた卒業生で、就職をしていると考えられる82名のうち、その職種として最も高い比率を示したのが「研究職・開発職」43.9％で、これに「(研究・開発職、教育職、医療従事者)以外の専門職・技術職」23.2％、「医療従事者」と「事務職」8.5％、「販売・営業職」4.9％が続いた。

最後に「現在の職務内容と卒業学部との関係」という質問（図8）について、本問は就職者に対する質問であるため、大学院に進学している者の回答を除外したところ、その有効回答件数は81件となった。現在の職務内容と卒業学部との関係につき、「大いに関係がある」が33.3％、「やや関係がある」が45.7％であった。回答者全体の79.0％が、卒業学部の教育内容と何らかの関係がある職務に従事している。なお、大学を卒業、もしくは大学院を修了した者81名中、転職経験をもつ者は5名で、全体の6.2％であった（図9)。

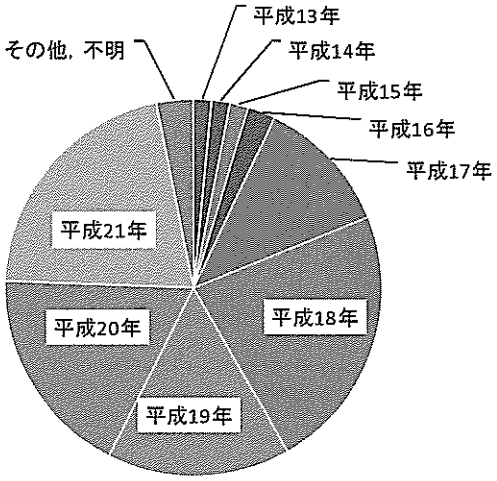

図１　学部卒業年

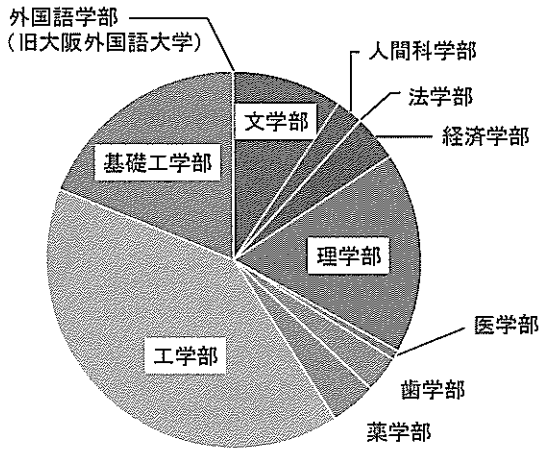

図２　卒業学部

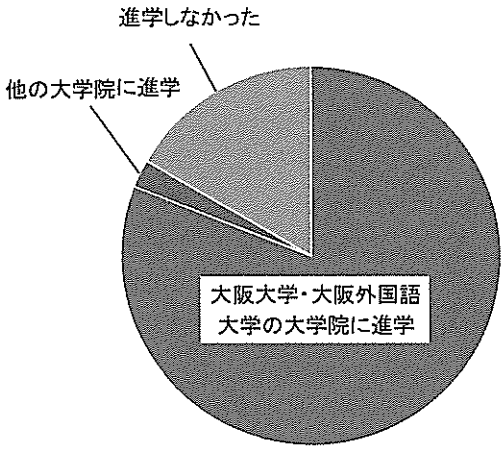

図３　学部卒業時の進路

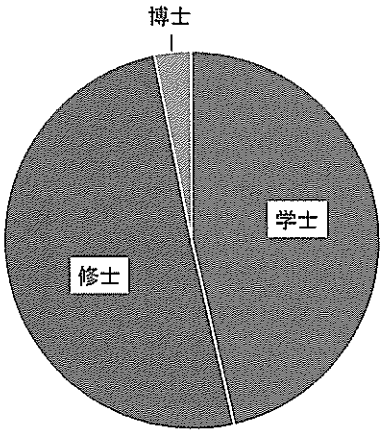

図４　現在の学歴

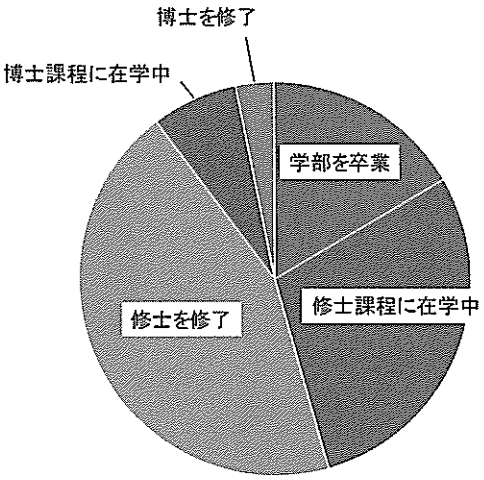

図５　学部卒業時の進路とその後の学業経験

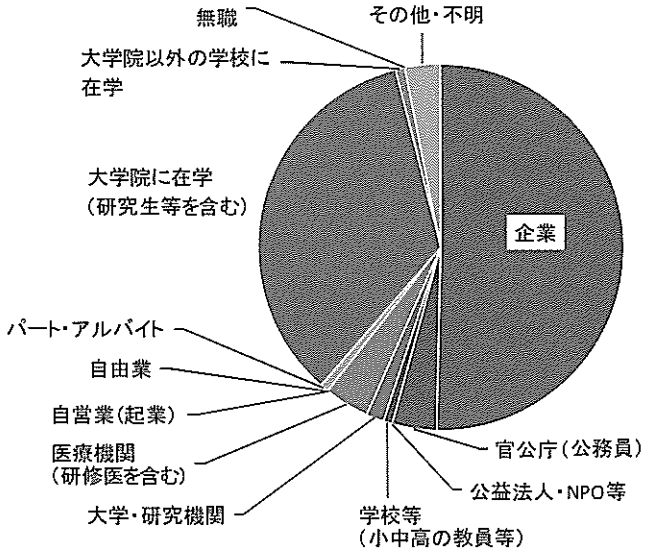

図６　現在の職

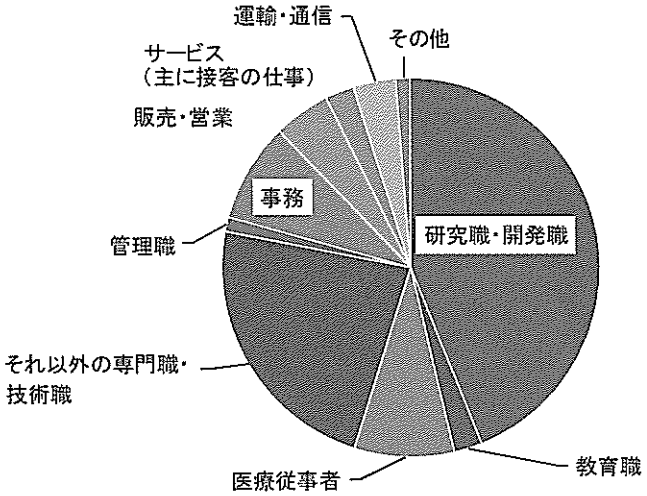

図７　現在の職務内容

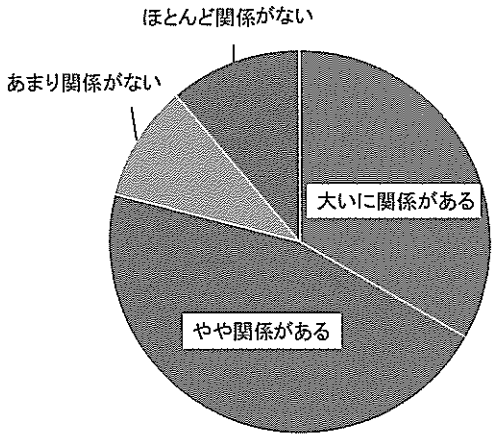

図８　現在の職務と卒業学部との関係

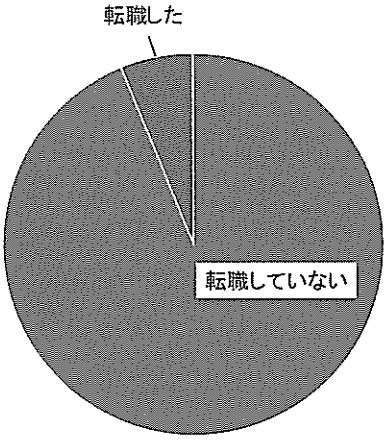

図９　転職経験の有無

これらの属性に関する質問から、本調査の回答者のうち、多くの回答者は理工系であり、そして学部を卒業して大学を離れた者の割合は16％にすぎず、修士課程に在学する者と合わせて回答者の半分が学士のみを有する者となる。多くの回答者は大学院進学者であり、しかも修士を取った者が半数近くを占めていると言うこととなる。結果の解釈にはこのような制約に配慮する必要がある。

3.2 全学共通教育（一般教養）、専門教育からなる学士課程全体を通して身につけた「素養」

卒業生に対して、「大学を卒業するまでの全学共通教育（一般教育）、専門教育の全体を通して、次に示す素養をどの程度身につけることができたとお考えですか。」という質問を行った。「素養」として提示したのは、図10に示した10の項目である。この図は、これらの素養を全体的に見るため、「とても身についた」から「全く身につかなかった」までを間隔尺度として平均を算出し、平均値の高い順に並べた図である（「わからない」は無回答扱い）。

「とても身についた」と「どちらかというと身についた」を合わせて肯定的回答とし、その割合を合わせて検討すると、「(10) 知識を統合し活用する能力（肯定的意見76.8％）」、「(9) 分析を通しての批判的思考力（同77.6％）」の2つは肯定的意見が75％程度まで達しており、それに「(1) 幅広い教養・知識（同67.2％）」が続いている。これらの能力に関しては十分に身についたと卒業生は判断しているものと考えられる。続いて「(6) 社会性（57.3％）」、「(4) 情報リテラシー（55.2％）」となるが、これらの項目が相対的に半数以上が肯定的に回答した素養である。一方で、「どちらかといえば身につかなかった」、「全く身につかなかった」という否定的な回答の方が多い、評価の低い項目は、「(3) 外国語での口頭と筆記によるコミュニケーション能力（肯定的意見28.0％）」、「(7) リーダーシップ（同28.2％）」、「(5) 市民性（同34.4％）」、「(8) 企画力（同38.4％）」、「(2) 日本語での口頭と筆記によるコミュニケーション能力（48.0％）」の順となっている。

なお、「市民性」「情報リテラシー」「社会性」の項目には、「わからない」と答えた者の割合が多いという傾向が見られるが、これは、当該素養と正課授業との因果関係について判断を留保する者が多くいたこと、そして「市民性」に関しては、その意味が十分に伝わらなかった可能性がある。

また、統計的方法による検討として、「とても身についた」、「どちらかというと身についた」、「どちらかといえば身につかなかった」、「全く身につかなかった」の選択肢による回答を間隔尺度とみなして、それぞれ4点、

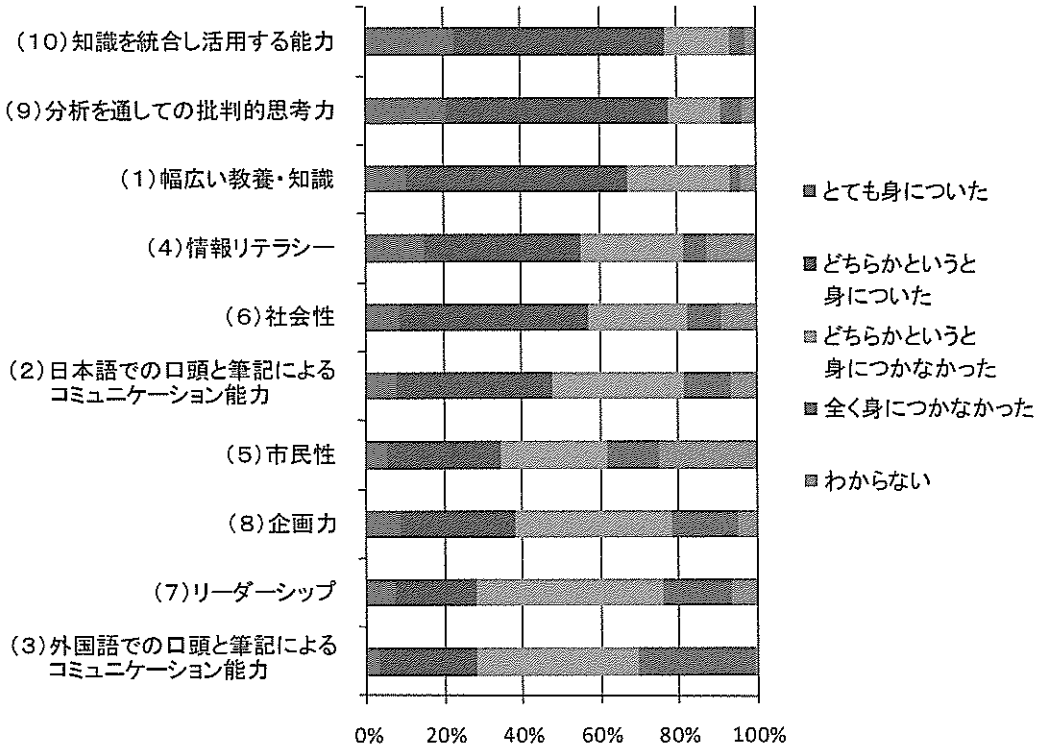

図10　大学を卒業するまでの全学共通教育（一般教育）、専門教育の全体を通して身についた素養

3点、2点、1点を与え、尺度の中央である2.5の値と差があるかどうかを検定した。その結果、「(10) 知識を統合し活用する能力」、「(9) 分析を通しての批判的思考力」、「(1) 幅広い教養・知識」、「(4) 情報リテラシー」の4つの項目で肯定的（危険率1%で有意）であり、「(3) 外国語での口頭と筆記によるコミュニケーション能力」、「(7) リーダーシップ」の2つの項目で否定的（危険率1%で有意）であった。なお、3.1で示した回答者の属性を要因として、これらの素養の得点についての分散分析を行ったが、属性間での有意差は認められなかった。

これらの結果を全体的に見て、否定的に回答した者の方が多かった素養については注意すべきであると考えられる。特に、外国語でのコミュニケーション能力、リーダーシップ、企画力は、大阪大学の教育目標である国際性とデザイン力に対応する能力とも考えられ、このような能力をより身につけさせようという教育目標を補完する情報として捉えられよう。

3.3 全学共通教育の良い点と改善を要する点

最後に、全学共通教育（一般教育）において、良い授業として印象に残る授業、逆に、改善の余地が大きいと思われた授業について自由記述をしてもらったので、そのまま掲載する（参考資料1)。なお、個人名や科目名等が特定できる箇所については、本報告書が公開データであることから伏せ字とした。

3.4 全学共通教育をより良くするために

最後に、卒業生の立場から見て、大阪大学の全学共通教育（一般教育）をより魅力あるものとしていくため、教育の内容・方法をどう改善していけばいいかについて自由記述をしてもらったので、そのまま掲載する（参考資料2)。なお、個人名や科目名等が特定できる箇所については、本報告書が公開データであることから伏せ字とした。

4. まとめ

本アンケートは、大阪大学のすべての学部卒業生を対象に行ったもので、合計127の有効な回答が得られた。分析の結果、「知識を統合し活用する能力」、「分析を通しての批判的思考力」、「幅広い教養・知識」、「情報リテラシー」の順に、「素養」の涵養に肯定的な意見が得られた一方、「外国語での口頭と筆記によるコミュニケーション能力」、「リーダーシップ」、「企画力」、「市民性」は、否定的な意見が多くあった。「市民性」、「情報リテラシー」、「社会性」については、そうした素養が身についたかどうか「わからない」との回答数が相当割合を占めた。「市民性」、「社会性」及びそこには挙げられていない「企画力」、「リーダーシップ」の涵養に対する卒業生の評価は、決して高いといえない。その原因の一端は、これらの概念を一義的に確定することに困難を伴うが故に、そうした「素養」の涵養を中心に据えた教育目標を掲げ、それに沿って実際に教育を展開する授業科目がそう多くはないことにあった、とも考えられる。

本アンケート調査における今後の課題として、以下の点を摘示しておきたい。本卒業生アンケート調査中、選択回答を求めた質問は、学生が在学時に身につけた「素養」の中身について問う項目唯一つのみであり、しかもそこで身につけた「素養」とは、全学共通教育（一般教養）に特化されたものではなく、全学共通教育と専門教育からなる大阪大学（及び旧大阪外国語大学）の「学士課程全体を通して身につけた『素養』」であるとした点に留意が必要である。従って、そこで身につけるべき「素養」が実際に身についたかどうかについての卒業生の認識も、「学士課程全体を通して身につけた『素養』」に関するものであったと理解しなければならない。付言すれば、そうした「素養」の涵養に対する評価は、主に、理系学部の卒業生によるそれであったことにも意を払う必要がある。

従って、全学共通教育に対する卒業生の評価を窺うに当り、当面は、今回の調査を通じ自由記述欄に寄せられた卒業生の意見を慎重に検討することが重要である。さらに、今後、同種のアンケート調査を企画・実施するに当っては、全学共通教育の効果や正課外教育に関わる選択式質問項目の充実を図り、学士課程における全学共通教育・教養教育の有効性の確認を行っていくことが肝要となろう。

謝辞

本調査研究にご協力をいただいた大阪大学卒業生の皆様、そして、卒業生への連絡の労をとってくださった大阪大学の教員の皆様に深く御礼申し上げます。また、本稿における結論や意見は筆者らが分析データ等から導いたものであり、必ずしも大阪大学ならびに同大学教育実践センターの公式な見解と一致するものではありません。

【参考資料1】自由記述（全学共通教育の良い点と改善を要する点）

良い授業　〇〇 〇〇を学ぶにあたって必要な基礎能力である空間把握能力を養うことが出来た。 悪い授業　特になし
一般教養であまりにも専門的な内容になり、1 年生が内容について行くのが大変なものが理数系の授業で多い。特に〇〇。 また、文系教科の〇〇は講義内容が高校レベル程度になり、あまり勉強にならない。完全な〇〇会話授業を行うとより意味のあるものになる。
良い授業 ： 演習等を行い、学生の身につくようにした授業（〇〇等） 悪い授業 ： 独りよがりで何を言っているか分からない授業。教える気を感じない、ただ、90 分の時間を使って自分の知っていることを話しているだけ。特に、OHP やパワーポイントを使用するくせに、配布資料もなく、またノートを取る時間も与えないような授業は最悪。何がしたいのか分からない。
良い授業として、〇〇〇〇といった授業が印象的です。 〇〇の授業ですが、今までに経験したことのないタイプの学問だったので、新鮮で勉強になりました。
一般教育の授業は基本的に受け身のまま終わってしまう授業が多かった。その中で、常に自分で考えよと啓発し、自発的に行動させてくれるような、私の中での良い授業は、思い出せるもので1つしかない。 　改善の余地が大きいと思った授業は、1 つの教科書（〇〇的な本）を先生がずっと話すだけの授業。
<良い> 〇〇学（正式名称は忘れたが、自由に自分で選択してよい講義のうちの一つ） -純粋に専門とは別だが自分の興味のある分野の勉強をできて楽しかった。 <悪い> 〇〇 -特に目的があるではなく、高校の延長のようなテキスト中心の講義は退屈。
〇〇：為になる
日本語の堪能な〇〇人が教えてくれる〇〇語の授業はよかった。 改善の余地どころか、ほとんどの授業は時間の無駄である。
おためごかしのような、表面的な授業がとても多かったように思われます。印象に残るような、より専門的な授業を求めます。
〇〇語の講義では、先生はネイティブの方でしたが、内容は高校の延長でした。そのため、あまり講義に積極的に取り組むことができませんでした。 外国語学部もできたため、さらなる〇〇語講義の向上を期待します。
よい授業は、先生の準備とやる気を感じられる授業です。話や内容に一貫性のある授業はそれを感じられます。 その上で、授業内で学生が参加できる仕組みがあればさらに良いです。まじめに受講する学生にとってはより興味を惹かれます。私自身について言えば、〇〇先生の「基礎セミナー」は現在の選考を決定する決め手になりましたし、〇〇先生の「〇〇〇〇」はまったく門外漢の理系の授業とはいえ、文系の学生にも興味を持てる内容で講義ながら学生参加もあり、強く印象に残っています。
良いと思った授業…〇〇の授業。過去の色んな思想に触れることができたから。先生が〇〇を好きそうだということが伝わってきた。 改善の余地が大きいと思われた授業…〇〇。本を読むのは楽しかったが、授業に〇〇を学びたいと思わせるような工夫がなかった。
良い授業: 〇〇〇〇による〇〇語の Reading 理由:殺人的な分量だったが、確実に〇〇語力の向上につながった。 悪い授業: 〇〇全般 理由:基本的なことだけで終わっていて、データ整理に用いる統計を駆使できる数学力を持つには個々人の努力次第だった点。
一般教養で〇〇・〇〇の講義を受けたのは良かった。 高校で選択していないと一生やることのない分野だが、社会で生きていく上で全く知らないと困るので。 文化についての単位を全く興味のない中から選ばなければならず得るものはなかった。文系学部の基礎講義から選べたらいいのにと思った。
第二外国語で〇〇語を履修でき、その後役に立ちました。 逆に大学に入って〇〇語の力が低下したように感じます。高校のレベルより低かったからだと思います。
少人数制の基礎セミナー以外ほとんど印象にない。「〇〇〇〇」という基礎セミナーはとても良い授業だった。

隔週で参加者が勧める1冊の文学作品を読んできて、内容についてディスカッションするものだった。
○○語の授業は先生によって内容に大きなばらつきがあるので改善してほしい。
阪大の外国語の指導は熱心だった気がします。 専門基礎などに関しては、位置づけと指導内容が中途半端に終わっていた気がします。
第２外国語の必要性について疑問を感じます。英語により注力した方がよいと考えます。
「○○○○」という授業を１年生の時に受講しまして、現代社会が法律によって成立していることを強く実感することとなりました。様々な身近な事象が法律と深くかかわっていることを理解することで、法律が世の中にどのようにかかわっているか理解することができました。
・第2外国語はまったく役に立っていない。 ・現在企業で働く上での専門性を身に付けるのに役立ったと思う。
落語に触れる授業があり、日本の文化に触れられて良かった
一方的でない授業を目指すとよりよい印象がもてるのではないか
特記事項なし。授業で刺激を受けて、自分で図書館で関連する本を読んだりしましたが、授業自体の印象はあまり覚えておりません。
覚えていないというのが、正直なところです。 このこと自体が欠点なのかもしれません。 口頭・板書に終始してしまうのではなく、大学教育という舞台を利用し実際に現象を目でとらえることができるような形態にしていただきたいです。
かなり前なのであまり良い回答はできません。 ただ、印象としては、共通教育では特別良いと思ったものはありません。また、改善の題材としては○○は面白かったですが、講師の思想が理解できず嫌悪感を抱いた記憶があります。
第２外国語が一律に必修であることの意義が見出せない。 他の教養科目も同様かもしれないが、卒業後はほとんどの場合で特に第２外国語を使用する機会がないことが考えられるため。
良くも悪くも、あまり印象に残っていません。
印象に残っているのは特になし 悪いと思ったのは、講師がただひたすら黒板に筆記していく授業
悪い　○○　良く分からなかった。
○○や○○等の専門科目は、将来に専門とするひと以外には全く意味のないものであると思う。
全学共通教育ではどちらも特にない。
どの分野でも基礎的な部分を丁寧に説明する授業は良い授業として印象に残ったが、背景も説明されないまま、教員の専門（と思われる）分野を淡々と説明された授業はあまり良くないように感じた。
良い授業は先生が外国人講師で、語学の授業。 語学力をつけるためには良いと感じた。 悪い授業は大して授業にも出ずに単位がとれてしまうような授業。 全く意味がない。どうせ授業にでるのならある程度の厳しさは必要。
授業科目は別として、良い授業は先生がわかりやすく説明しようとしてくれていました。悪い授業は先生の知っていることをベラベラ話すだけの授業でした。
私が受講した語学の講義は、教科書の指定された部分を和訳して発表するだけのもので、文法や語彙に重点をおいている内容なわけでもなく、コミュニケーションを重視している内容でもない中途半端な印象を受けました。講義の回数は約 15 回と短いものではありますが、巷の○○会話教室のように簡単な内容でも○○語で説明できるようにすることを目的にするとか、少しでも正しい文法や語彙を身につける、○○語で論文を書けるようにすることを目的とするなど、漠然と講義をするのではなく、回数が少ないからこそ範囲を狭めて具体的な目標を設定したほうが良いと思います。 その方が学生も目標を具体的に認識することができるので、成果があがりやすいと思います。
○○語 外国の先生の授業は、発音がしっかり身に付き良かったです。
主題別科目の必要性が分からない。 ○○の演習は非常によかった。後の研究室生活で役にたった
経済学部・○○先生が担当していた授業が印象に残っています。月に一回新聞記事等から個々人でテーマを決めてレポートをまとめ、学生同士で読み合う授業でした。問題提起をする力、思考力等が養えたと思います。

良い授業:〇〇語:予備校講師による講義で、学生の興味を惹くのが上手い講師だった 悪い授業:〇〇:必要以上に学生を落としていた(単位取得に関して)
全体的に演習形式・参加型のものがなく、社会性やプレゼン能力などは、専門教育の演習の中で初めて身についた。
印象に残っている良い授業は語学です。私が選択していた〇〇語の授業は、毎回冒頭に小テストがあり、勉強は大変でしたが、その分身に付いたと思います。 逆に、大教室で行われる講義は内職をしている学生が多くいたので残念に思いました。学生の意識の問題ですので、改善の余地が大きいというものではないのですが、なるべく先生が一方的にご講義されるのではなく、学生の発言する場面もあるような双方向の授業の方がいいのかなと思います。
・良い授業として印象に残る授業 〇〇語。外国人の先生が講義を行い、生の〇〇語を聴くことができたから。
①よい授業とは・・ 今思えば、実践的なカリキュラムが多い授業というのは、記憶として頭に残っており今でも活用できるものが多い。受けている最中は、かなり面倒であると感じたところもあるが、頭だけでは会得できない部分が多かったように思う。 ②改善の余地が大きい授業・・ 講師と生徒の関係性が一方通行である授業だと思う。共通教育では、かなり多かったように感じている。知識や技術の押し付けは、なかなか頭に入ってこないし、ただ単位を取るためだけのものになってしまう。
第二外国語は、あまり意味がなかったように思います。
いい授業としては、〇〇語で、〇〇人の先生に教えていただく授業がありましたが、実践形式の会話が多く、内容も面白かったので、楽しみながら内容を身に付けることができました。 悪い授業としては、〇〇で、授業についていけない学生を置き去りにしたり、授業開始時に教室にいなかったり授業時間内に課題が完成しなければ欠席扱いにする先生がいました。3 回欠席すると単位がなくなるため、授業時間内に課題が完成しなければ欠席扱いというのはさすがにひどいと思います。
文学部の授業はものを考えることが多く、受講していてよかったです。
〇〇語はレベル別でクラス分けされていてよかった。 しかし、他の授業で同じ授業名で扱う内容もほぼ同じなのに先生によって内容(最終的な応用レベルや理解度)が違うものがあった。
何かの授業という点では覚えていないが、ほとんどすべての能力は研究室もしくは卒業後に身に付いたものだと認識している。 確か 3 回生の実験だったと思ったが、課題と予算だけ与えて最善の結果を残すべく競うという講義があったが、とても有意義だった記憶がある。 座って聞くだけで身につけられるようなものはない。
良い授業として印象に残っているもの 〇〇教授 〇〇の講義(親鸞に関する講義でした。) ・教授の熱意が伝わってくるとともに、解釈も新しく、大変興味深かった。 改善の余地が大きいと思われたもの 〇〇語の授業(〇〇先生によるもの) ・楽しかったが、内容が易しすぎた。
講師が一方的に話す形式の授業よりは、学生のほうからも積極的に意見を出せるような、少人数での相互的な授業が面白かったように思います。 教材がしっかりしていたり、講義の内容がしっかりと体系だっている授業は、卒業後に見直すことがしやすく、ありがたいです。
よい授業:楽しそうに、 かつ興味を持たせる講義をする。 理由- 興味がわき、 講義内容を理解しようと努めるから。 改善の余地が大きい授業:スピードが異常に早い。 理由- 初めて触れる概念などは多くの学生にとって難しく、 それに加え講義スピードが早いと、 学生の勉強意欲を大幅に削いでしまう可能性があるから。
人数の多すぎる授業はあまりよくないのではないかと思います。
授業内容に対しての演習を行わない授業があった。大学生にもなってやることではないかもしれませんが、演習を間に挟んで進めた方が理解しやすい。

○○を一般教育で受講したが、個人的には面白く、印象に残っているが、理系の人間にとっては、雑学程度でしかない。 ○○語の講座で、映画を使用した講座があったが、対象の映画が、古典とまではいかないが、現代を描いた映画ではないので、言い回しが古いところがあった。現代の○○語を学べる講座のほうが役に立っていいのではないかと思う。
悪い授業　○○実験 レポートが手書き以外、不可だった点。学会の原稿や論文はパソコンを使って、作成するのに、手書きしか駄目というのは、良くないと思った。
○○・○○の講義は、高校教育の延長線上にあるといった位置づけであった。そうではなく、現代の科学的背景をもとにどのような人材・技術が求められていているのかといったところをまず教育するべきであると考える。
良くも悪くもあまり記憶に残っていないのが現状です
○○語のリスニングを週１度受講してもほとんど身にならないので非常に効率が悪い。
教授がひたすら板書する授業 結局、自分で解いてみないと理解できないし、黒板に書くことは教科書にも載っていることがほとんどだった。
基礎セミナー等の、専門的な研究所が研究成果を話してくれる講義（例：蛋白質研究所）は、具体的に研究している内容を知ることができただけでなく、「阪大」という国立総合大学の水準の高さを実感することができ、印象に残っています。 また、○○語では、グループで寸劇を作って他の学生の前で発表する授業があり、積極的に○○語のコミュニケーションを学ぶ機会を提供してもらえたことが印象に残っています。 ○○や○○語、○○等の基本的な講義は、マンネリ化していて印象に残っていませんし、特に役立ったこともないと思います。
学生が興味を持てる内容の授業がとても良かったです。 改善してほしい授業は、声が小さかったり、学生に興味を持たせるような授業をしない先生の授業です。
基礎工学部の○○は、時間をとられたが研究の指針になったと思う
基礎セミナーの１つであった○○○○の仕方についての講義では、パワーポイントの使い方や発表までのグループでの話し合い、発表時の姿勢を学ぶことができてよかったです。 ○○○○では学部や学科によって進度が異なっており、進んだ内容を学べなかったのが残念です。
普段知りえない政治の背景についての知識を得られた講義が良い授業として印象に残っている
改善の余地について ○○語教育のよりいっそうの充実。 TOEFL のテストも一度あったものの、特にフォローも無し 大阪大学全体として、学生の語学力を総合的に挙げるためのサポートが必要
○○の○○先生の講義では講義回数を一回残して期末試験を実施し、残りの一回の講義で学生が間違えたところを中心に解説した。普段の講義で演習の時間を取れる講義ならこのようなことはしなくてもよいだろうが、講義で手一杯となる授業では解説する場を設けるべきだと思われる。
医学系の授業が生きていく上で知識として身につけておいてよかったので、よい授業だったと思いました。
良い授業：○○語 当時は厳しかったが、それだけ身についたと思います。 改善の余地がある授業：忘れました
自分の専門以外の知識に触れるのは今後あまりないと思うので、その点で知識の幅をもたらすものだったと思う。
基礎セミナー全般、特に「○○○○」はよかった。 必修科目全般は授業内容が有益だった実感がなく、改善の余地があるのではと思う。もちろん、受ける側の問題もあるが。
基礎セミナーは、入学してすぐに、自分の興味のある分野を自分で考えながら学習することが出来るのが良かったと思う。また、少人数であるためか、教授のやる気も比較的あって大学で学んでいるという実感を持つことが出来た。 一般教育自体にあまり記憶がなく、印象に残っている授業がほとんどない。もう少し学生が興味を持って聞ける授業になればいいと思う。少人数であればあるほど、学生は真面目に取り組む（取り組まざるを得ない）のではないかと思う。
もっと○○語の授業を高学年まで充実させて欲しい。
○○語の授業は、先生が工夫してくださって、とても楽しい授業で出るのが苦にならなかったのは、良かったのですが、身について使えるようになった部分が少なかったのが残念です。

○○語の授業は興味深く、文化の違いにもふれることができ、知識も深めることができたと思う。 悪いと思った授業はありませんが、あまり印象にのこった授業がなかったことが、あえていうなら、悪い点と思います。
良い授業:○○や○○も学ぶことができ、非常に知識の幅が広がった。 悪い授業:先生が一人勝手に話して、授業が終わり、非常に興味が出なかった。
＜良い＞ 主題別科目のある授業(講義名は忘れました)。工学とは関係ないヘーゲルの話でしたが、とてもわかりやすく、熱い思いで担当教官が話されていたので興味がわいたのが良かった。 ＜悪い＞ ○○。自分の考えで教科書を修正するなど、理学部向きで担当教官の自己満足に過ぎなかったから。
少人数制を導入し、自ら積極的に考えさせる授業は非常に印象に残っている。しかし、大人数(30～40人以上)では必然的に受動的になってしまい、知識の蓄積には至らなかった。
良い授業:学生に如何に効率的に教えるかを考え、ノートに書く内容等の準備を事前にやっている授業。 悪い授業:教官自身が授業中に考え込んで、数式の計算ばかりを見せられる授業。または教官の声が全く聞こえない授業。

【参考資料2】 自由記述 (全学共通教育をよりよくするために)

2回生に上がるときに進振りがあるので自分の進路を決めやすいように、より専門課程の内容を知られるような授業形態にして欲しいと思う。
大学3年までは自由に一般教養を取らせてもいいと思う。
受講している学生にただアンケートを取るだけでなく、授業内容の善し悪しがはっきりとした形(給与、待遇等)で教える側に反映されない限り、なかなかより魅力のあるものにしていくのは難しいと思う。また、学部によっては自由度が低く、もう少し選択できる分野の範囲を広げた方がいいと思う。
-ただ先生の講義を聴くだけの受身の授業を減らし、生徒自身が授業に参加できる(させる)環境を作る。- 私自身が持っている改善策としては、もっと大学院での授業体系を取り入れる(工学研究科に限ったことかもしれないが)。例としては、生徒同士のグループワークや生徒自身がプレゼンを行う機会を増やす。つまり、先生の講義を聴いたり、自分で調べて勉強したりするインプットの過程だけでなく、それをアウトプットして、他人に分かりやすく説明したり、ディベートしたりする過程をもっと作ってあげる。教科書1冊やるにしても、生徒にテーマを与え、勉強した上でプレゼン発表させたり、むしろ各章ごとに振り分けて、生徒達自身で講義をさせたりするといったことも面白いと思う(実際に大学院の授業であった)。 こういった授業体系の大学院での授業は本当に面白かったし、知識だけでなく、プレゼン力やディベート力など身に付いたと思えることが多々あった。 日本における受け身の授業体系から抜け出し、生徒自身にもっと強く当事者意識を持たせることが大切だと思う。
選択の自由度がとにかく低く、[学んでいる]というよりは[学ばされている]といった感覚に陥る事がある。 各分野の一流の学者がそろっているのだから、もっと学生が他学科の興味のある講義を受ける事の出来るシステムになれば良いと思う。
語学はリーディング・ライティングだけでなくスピーキングまで学んだ方が良い
少ししか授業で使わないのに、教官の著書を買わせるのはどうかと思います。
講義ではなく、テーマを与えて自習させ、発表させる形式にする。
大人数の授業が多すぎます。せっかく日本の知能部である教授から教わっているのに、教授とコミュニケーションすらとれないなど、国立大学として意味がありません。大量の生徒の管理は教授側の負担にもなります。「共通教育」が「義務教育」のようになってしまっていては、教える側、教わる側、両方にとって一利無しです。 教授と密接に関わることのできる、少人数制の専門性の高い授業を求めます。
学生の顔を見ないで一方的に話し続ける自己満足の講義を減らしていただければ、多少は改善されるように思います。
学ぶ内容の本質を生徒に理解させるような、工夫された授業を行うと良いと思います。
基礎力の確立の重要さは理解しているが、もっと目先の利益 (ある分野を理解すると、具体的にできること等)を明示してあげた方が 今の学生のやる気はあがると思う。 また、分厚すぎるシラバスは読まれない。
まがりなりにも高等教育を受けた人材なのに、社会を支えていける基本的な知識に乏しいのは残念。理系でも政治や歴史などについて知っているべきだし、文系でも統計や地学など生活に密着した科学は正しい知識を持っていてほしい。大学に求めるべき事ではないかもしれないが。 また一般教養、専門どちらも、課題や試験がやりっぱなしの感がある。フォローをせず、解答を返しもしないのはどうか。
履修科目の選択できる幅を広げることで、自分の興味のある分野をより深めることができると思います。
共通教育よりも専門教育の方がおもしろい。自分の専門ではなくても、専門教育のように専門的なことを、しかし丁寧に学んだ方がよいのではないか。「～入門」という授業はわかりやすくても、何も残らない。
少人数での授業を行ってほしかった。
他の大学は、教養教育について非常に手を抜いている印象があります。高校生の基礎学力、教養、モラルの低下は大学の底力の喪失に直接、繋がると思いますので、指導教員、カリキュラム編成者は、学生のためになるような(学生がテストに追われるだけでなく、授業を受けて感動し、自分で宅習したくなるような内容を提示)授業を展開していただきたいと思います。大学1、2回生はまだ良くなる要素がたくさんあると思います。
より学生主体の授業カリキュラムを作ることが大切だと考えます。

幅広い分野の講義を提供して、それぞれがどのように関連しているのかを実感できるようなものにしてほしいです。いまだに般教は分野ごとに独立でつながりが今一つ理解しにくいものとなっているような気がします。
研究室配属を前倒しし、早期段階で専門的な思考を身につけたほうが、就職活動や今後の進路決定に役立てることができると思う。
語学学習の授業による差を、もう少し埋める。
一般教育は廃止すべきです。
授業を選択するときにより具体的に内容について知ることができ、また自分の選択が反映されやすいように改善されればいいと思う
専門分野にとどまらず、さまざまな分野について、自分で調べ、考え、それを以て各学生が主体的に教養的総合知を構築できるような方向にすすめばよいと考えます。共通教育の目的は、専門知識の寄せ集めではないと思いますので。
既にあれば申し訳ないですが、次の 2 つがあれば良いと思います。 1. 少人数の英会話教育 2. インターンシップを単位として認める制度
自分で考える形式、チームで課題に取り組む形式のものが望ましいと思います。 聞いているだけの講義ではやはり印象にも記憶にも残りにくい。 専門教育では、ある程度の知識習得を目指しているため実現は難しいのかもしれませんが、一般教育では生徒が主体となって何かにひたむきになる形態も可能ではないかと思います。
どちらかというと「工学部に入ったのに何故外国語、何故化学」という疑問を持ってしまいました。もちろん知識の幅を拡げるため、なのでしょうが。それよりも、自分達の学部の卒業生がどのような仕事で活躍しているのかを伝えたり、自分達の学問はどういう社会的意義があるものかを考える、といったことの方が、大学という高等教育の場では魅力有るものではないかと思います。
一般教養の講義であっても、大人数での講義形式はできるだけやめるべきだ。 受講人数が増えすぎると教員の学生への目配りが難しくなり、また学生にとっても「集団に紛れる」といったような受講への消極性の素地になってしまう。
共通教育の役割の一つは、大学受験のための詰め込み学習から、本当に学びたい内容の探求への橋渡しだと思います。専門分野や必修科目に縛られず、一人一人の将来の研究や興味に合わせて自らが必要な内容を選択できるよう、選択の幅の拡充と、カウンセリング制度の整備が図られると良いのではないでしょうか。
もっと社会勉強ができるような授業 例えば、幅広い分野でインターンシップのようなことを授業に組み込むことが出来れば、社会に出て役に立ち、さらに、就職する際にやりたいことや自分にあった仕事が見つけやすい環境になるのかなと思います。
浅く広くではなく、専門分野と密接に関係し、専門分野を学習するときに必要となる知識を習得できるような教育が望ましい。 一般教養が一般的過ぎ、全く役に立たないし、記憶にも余り残っていない。
コミュニケーション能力を高められる授業。 CSCD のようなものを一般教育にも取り込めるといいと思います。
学部間に決められた専門科目を排除して、広く教養期間として単位を取得する期間を作ればよいと思う。 もちろん、専門科への移行期間に対する配慮などがあるとは思うが、たとえば、入学後 1 年間をその期間に充ててはどうか。「教養学部所属」のような制度をひいて、1 年間、興味のある授業を履修し、単位として認定した上で、例えば理学部に入学したけど経済に転科したいなどの希望に対し柔軟に対応すれば、より高度な社会人ができると思う。
成績評価の仕方をより明確にして欲しい。 出席と課題の配点は説明されることが多いが、テストや提出したレポート等の点数や評価がどの程度のものであったのか、学生に伝えられる機会は殆ど無かった。 学生が自身の成績の評価とその具体的な内訳を知ることは、学習内容のより深い理解と、学習への意欲向上のために有益であると思われる。
どんな分野でも純粋に学問としてのおもしろさを追求するような授業が期待されると思う。 特に文系教科（文学部）は事象の羅列に流れがちなので、歴史の流れや、現代とのつながり・比較をして初学者も実感として捉えやすい授業がもっとできるのではないかと感じる。
基本的に阪大生は真面目な人が多いので、それなりに共通教育は機能していると思うが、やはり受身な部分が強く、自分から何かを行ったりする力はつかないような感じを受けた。

阪大の教養科目は他大学と比べると良いと思います。それは他大学と比べて、授業の出席に対して厳しいからです。やはり、教養のときにサボり癖がついてしまうのは良くないと思います。 もし、改善する点があるとすれば、入学した学部の専門分野の授業を１年の前期から少し混ぜると良いと思いました。
もう少し少人数化し、それぞれの生徒が参加できる形の授業を行う。
プレゼンテーション能力を高めるような、参加型の授業がもう少しあれば良いと思います。
専門科目につながっていく科目は徹底して定着させるべきである
個人の選択によると思いますが、私の場合、自分が当時関心を持っていた社会学的な分野ばかりを選択してしまったので、今思えばもっと幅広い分野を履修すればよかったと思います。各分野から必ず1科目以上履修することを要件にし、バランスの取れた教養を身につけられるようにするのもいいと思います。
実践的な学習。教育においても、ジャーナリズムなどを学ぶべき。
研究に向いていても教育に向いていない講師・教授が多い
参加型の授業をもっと増やすといいと思う。 これまでもそういう授業はあったが、希望しても定員が少なくて漏れてしまったり、他の授業と時間が重複していたりといった理由で、ほとんど受講の機会がなかった。授業数を増やす・あるいは必修にするといった対策をしたほうが、もっと多くの学生が受講できるようになると思う。
私は文学部でしたので、共通教育（主題別）での理系科目の授業が興味深かったです。その専門的な雰囲気にふれるだけでも満足ではあったのですが、内容が専門的すぎてついていけなかったというのが正直なところです。 予備知識がないので、少し導入的な内容から入っていただければありがたかったかなと思います。 高校までとは違う専門的な勉強ができるのが大学での勉強の醍醐味であるとは思うのですが、せっかくの授業もついていけず全く理解できないまま進んでしまっては勿体ないので、なるべく内容についていけるようなものにしていただければと思います。
・教育方法について、授業毎にレポートを出す方法は授業内容の復習ができ授業の理解を深めると思う。 ・先生は単に教科書をなぞるだけではなく、自分の分野の最新のトピックや自分の研究分野の話などを交えれば講義がおもしろくなると思う。いろいろな分野の先生の話を聞くことは、自分の視野を広げることにつながる。
より、社会情勢や環境、企業をからめた教育を行って欲しいと思う。ほとんどの学生は大学を卒業して、企業に就職するはずである。大学時代から、企業の感覚や考え方というものを身近に感じる必要があるし、そうすることで、社会に出るときのモチベーションの上昇や自分自身の方向性の早い段階での確立ができるように思う。専門教育では、そういう授業もいくつかあったが、一般教育でももっと取り入れるべきだと思う。
聞くだけの授業ではなく、何かを生み出す授業にすべき。せっかく異なる学部の人と関われる機会なので。社交性も身につくと思います。
もう既に行っているかもしれないですが、学生に授業に対するアンケートを実施し、先生・授業の評価をしてみると、よりよい授業の方向性は見えてくるのではないかなと思います。 ただ、簡単に単位をくれる先生に高い評価をつけたり、いい授業をするものの厳しい先生には低い評価をつける傾向はあると思いますので、その点は注意が要るのではないかと思います。
共通教育では学部の専門ではない他学部の授業を受けることで幅広い知識を身につけることが出来るのが魅力だと思います。あまり学部で制限をつけず、選択の幅を広くしていただければと思います。
他の学部の授業でもおもしろそうなものはいろいろ受けたいと思った。 プレゼン技術やコミュニケーション能力に関する授業があるといいと思った。
社会人になってから役に立つものに変えていくべきだと思う。 そのほとんどは実践で身に付くものだから基礎知識をつけるということにはなると思う。 私としては政治の仕組み、経済の仕組み、社会保障の仕組み、流通の仕組み、お金の仕組みあたりがよいと思う。 どれも知っておくべきで、遅かれ早かれ必要になる可能性が高いと思うからだ。 専門的な知識は教授陣のしてくださる講義では難しすぎて雑学にすらなりにくい。
いろいろな分野の最新の研究に触れることができる全学共通教育は、大変興味深いものでした。このまま続けていっていただきたいと思います。
文理の垣根をなくした複数学部共通の講義数を増やす、かつ、その講義の形式として小グループ単位での課題解決を中心に行う。これらによって、市民性、社会性、思考の多様性、リーダーシップ等様々な能力の向上を期待出来る。

浅く広い知識を身に付けさせるのがよいかと思う。 なぜならば、 将来多くの人と共通の話題をもつ可能性が高まるから。
副専攻のようなことをしてみてはいかがかと思います。
講義より、全員参加型のディベートなどが、積極性や意見力をあげるために良いと思います
可能であれば、班分け等による少人数かつ学生参加型(テーマに対する創造等)にしたら魅力的かつ、コミュニケーション能力向上等になるかと存じます。
私学などに比べて、就職活動への力の入れ方が小さい。企業の説明会などはあるが、学生のコミュニケーション能力やプレゼン能力やディスカッション能力をさらに向上させるような講座が、一般教育のなかにあってもいいのではないかと思う。
専門分野と関連のある、他分野の授業を増やしていって欲しい
工学部の電子情報エネルギー工学科に所属していたのですが、授業がほとんど必修で、選択肢が無かったため、もっと選択肢を増やしてほしいと思いました。
語学教育にさらなる注力をするべきであると考える。 特に入社直後、社内評価に利用される指標としてTOEICスコアは重要であり(唯一の評価指標といっても過言ではない)、昇進に必須であることが多い。 学生がこの事実を知るのは、ほとんどが就職活動中である。 語学講義にはこのような社会的背景をまず知らせて学生の学習意欲を引き出す必要があると考える。
聞くだけの講義ではなく、積極的に参加させるような講義を実施するべきだと思う
英語については自分の意見を英語で話すことに重点を置いたらいいと考える。もちろん、選択次第でそのような講義もあったが。
まずは目的意識が大事だと考えられる。この講義を受けることで何ができる力が身につくのか。しっかり自覚を持った上で学ぶ姿勢が大切である。
必修科目は興味のない分野ばかりで、講義に対する態度が消極的になり、1回生の時は単位を取るというやっつけ仕事のためだけに大学に通っていたイメージがあります。そのためか吹田キャンパスに比べて、豊中キャンパスにはほとんど印象がありません。 もっと自由選択科目の比率を高めて、学生の自主性を尊重する必要があると思います。
阪大だと、修士へ進学するのがほとんどですので、大学院生の研究室生活等の紹介があれば、将来の展望が見えて安心できると思います。
少人数制や、学生の参加型の授業であれば、より魅力的になると思います。
実例をたくさん用いてほしい。自然災害の授業では被害や助かった例の実例が多かったため言われたことが印象に残っています
外国語について、当時は基礎工学部で中国語を選ぶことができませんでした。文理によって求める外国語のレベルが異なると思いますが、理系同士ではそれほど差がないと思いますので、学部学科を超えて外国語の講義を行うといいと思います。 また、人数が多い講義やスライドを使用してスピードの速い講義をする場合、授業内容を覚えたりノートに書き留めたりすることが難しいので、Webでの復習ができるとうれしいです。
履修可能な講義の分野の範囲を広げる
文系、理系ともにさらに授業の選択肢を増やすべき 文系と理系との接点があまりにも少ない また専門教育に関しても、自身の研究と隣接する分野等があるので 門戸をさらに開放して、取りやすい状況を作るべき
共通教育は幅広く学ぶことができる分、目的意識が曖昧になりがちです。そこで学ぶ内容がどのように将来役立って行くのかということを明確にするための工夫を講義に盛り込んでいくべきだと思います。
「日本語での口頭と筆記によるコミュニケーション能力」を伸ばすのが第一ではあるが、全学共通教育のうち日本の政治や法律以外の内容を扱う授業をできるだけ英語でやるようにするべきだろう。勿論、学生は英語で実施される講義を幾つか受講しなければならないという制約を設けるのが前提となる。
1年の時だけでなく、2～4年の時も授業を受けることが出来れば幅広い知識・教養を身につけることが出来ると思います。 そのためにはキャンパスを超えて授業を受けることが出来るシステムが必要だと思います。
選択の余地を増やす。もしくは似たようなことをやっている授業は淘汰していく。
受験当時の学力をもっと高め続けられるようにしていけばよいと思います。
英語教育のさらなる充実。

フィールドワークを多くし、またチームで取り組むタイプの授業もいくつかあっていいと思った（多いのは困るが）。 学生は5、6人のグループができてしまうと、そこからそれ以上の人数と関わっていくことが少なくなってくる。せっかく多種多様な学問分野を扱っている大学なのに、もったいない。基礎セミナーでは、学部・学科の垣根がなく、そこでやりとりした内容は面白かったし、後に活きてくることも多かったように思う。もっと、強制的にいろんな学生が接点を持つような仕組みにしてもいいのではないか。形式的な知識、基礎力は必要になってから学ぶことも多いので、ただ形だけの授業は減らした方が良いと思う(共通教育の場合)。
理系の学生にとっては、文系の学習をする唯一の機会となるので、その学習の意義や得られるものを明確にした方がいいと思う。一般教育なので、深い専門的内容をメインではなく、その分野への興味の入り口となるような魅力ある授業内容にして欲しい。
語学の授業の充実
聞いているだけの授業は身につかない。 難しいことではなく身近なことに結びつけた上で、自分で考えたり、ディスカッションする授業であれば、楽しくその後にもつながるものになると思う。
一方的な授業ではなく、学生参加型の授業をとりいれたり、テストも見据えた抑揚のある授業もとりいれると、より興味深く、印象に残るものになると思います。
人気のある授業は、受けたくても抽選で外れることが多々あったので、教室が大きなところで行ってもらうか、又は、前期・後期共にその授業を開催してほしい。
全部の授業で取り入れるのは難しいと思いますが、全 15 回ある授業の中に数回グループワークやグループディスカッションなどを入れると良いかと思います。特に大学 1 回生の時は友達も少ないですし、幅広い知識と共に交流、発言力などをつけるという意味でも良いかなぁと思います。
一般教育の充実には学生の意志とやる気も重要だが、教育側の熱意は学生にとって敏感に感じ取れるものである。一般教育専任の講師を出来るだけ多く招へいし、更に構内だけでなく構外とのコミュニケーションを図れる講義を増やしてほしい。
基本的なことですが、教室全体に教官の声が聞こえるようマイクの使用を徹底してほしい。

【参考資料3】 質問紙

大阪大学・卒業生アンケート
全学共通教育（いわゆる一般教育）質問票

大阪大学　大学教育実践センター
高等教育研究開発部門
平成 21 年 12 月 18 日

時下益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。

大阪大学大学教育実践センターでは、いわゆる授業アンケートの結果を基に、在学生の意見を参考にしながら授業改善に取り組んできたところであります。

今回、みなさまにお届けいたしましたアンケートは、平成 17 年 3 月～平成 21 年 3 月の間、大阪大学及び大阪外国語大学を卒業された学部卒業生の皆様方を対象に行うものです。

卒業生の皆様方から、在籍当時の本学の全学共通教育(いわゆる一般教育)に対して、どのようなご意見やご感想を抱いておられるのかをご教示いただき、今日の全学共通教育の一層の改善の参考にさせていただくことを目的としております。

今日、大学に対しては、「教養」と「専門」を通じた系統的な教育課程を通じ、卒業生の皆様にどのような付加価値を与えることができたか、といった視点から大学教育の在り方を捉え直すことが求められています。上記のような視点から、本学の教養教育の内容を再考してもらうことは、卒業生の皆様のみができる営みです。のみならず、大学院に進学して専門研究にいそしんでいる卒業生の皆様、企業等に就職し社会の第一線で活躍している卒業生の皆様が、当時大学で学んだ教養教育を振り返り、それをどう評価しているかをお教えいただくことは、「教養教育」に新たな価値を発見する契機ともなる、と考えています。

ご多忙な中恐縮に存じますが、上記趣旨をご高配いただき、本アンケートになにとぞご協力賜りたく、切にお願い申し上げる次第です。

質問票へのご回答は、平成 22 年 1 月 10 日までに、以下の方法のいずれかでお送りください。

(方法 1): 以下のアドレスにアクセスし、web 上でご回答ください。
http://enq.cep.osaka-u.ac.jp/gradenq/
(このアドレスから回答ページに移動します。)

(方法 2): 本ファイルに回答を入力し、replygrad@cep.osaka-u.ac.jp 宛に添付ファイルでお送りください。

なお、ご回答いただいた質問票への回答は厳密に管理し、上記の目的以外に使用することはいたしません。回答結果は統計的にとりまとめた上で当センターの web サイト(http://www.cep.osaka-u.ac.jp)等で公開し、大阪大学、ならびに卒業生の皆様方にも還元することを予定しておりますが、回答された質問紙をそのまま公開することはいたしませんし、また回答者を特定することもいたしません。どうぞ皆様の忌憚のないご意見をお聞かせください。

大阪外国語大学を卒業された方へ
現在の大阪大学では、「全学共通教育（一般教育）科目」を大学教育実践センターが担当しており、旧大阪外国語大学を卒業された方にもアンケートをお願いすることになりました。そこで、下記の「全学共通教育（一般教育）科目」については、旧大阪外国語大学の4年間を通じて実施されてきた、いわゆる「一般教育(総合科目・副専攻語科目)」に読み替えてご回答ください。

なお、この件に関しまして、ご不明な点等ございましたら、大学教育実践センター・教育実践研究部・高等教育研究開発部門（早田幸政、齊藤貴浩：replygrad@cep.osaka-u.ac.jp）までご連絡ください。

＜回答方法＞

添付ファイルでお答えいただく場合には、回答が分かるように記載していただければ結構ですが、次のような方法を想定しています。参考にしてください。

・選択肢がある場合には、該当する選択肢を残してください。
・括弧がある場合には、具体的に記述してください。
・自由記述の枠がある場合には、具体的に枠内に記述してください。

＜以下の質問にお答えください＞

1．学部卒業年　　平成（　　）年３月

2．卒業学部
＜文学部／人間科学部／法学部／経済学部／理学部／医学部／歯学部／薬学部／工学部／基礎工学部／外国語学部（旧大阪外国語大学）＞

3．学部卒業後大学院に進学されましたか
＜大阪大学・大阪外国語大学の大学院に進学した／左記以外の大学院に進学した／進学しなかった＞

進学された方はお答えください：
(1) 最終的な修了年月　　平成（　　）年（　　）月
(2) 最終学歴　＜修士、博士、専門職学位＞　、学位の分野（具体的に：　　）

4．あなたの現在の職と職務内容(もっともふさわしい項目を1つ選んでください)

(1) 現在の職

＜企業／官公庁(公務員)／公益法人・NPO 等／学校等(小中高の教員等)／
大学・研究機関／医療機関(研修医を含む)／自営業(起業)／自由業／
パート・アルバイト／大学院に在学(研究生等を含む)／大学院以外の学校に在学／
無職／その他(具体的に:＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿)＞

(2) 現在の職務内容

＜研究職・開発職／教育職／医療従事者／それ以外の専門職・技術職／管理職／
事務／販売・営業／サービス(主に接客の仕事)／保安・警備／農林漁業／運輸・通信／
生産工程・現業／上記以外のもの(具体的に:＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿)＞

(3) あなたの職務は、卒業学部の内容と関係ありますか

＜大いに関係がある／やや関係がある／あまり関係がない／ほとんど関係がない＞

(4) 今まで、最初に就職した後に、転職を経験されましたか

＜していない／1 回転職した／複数回転職した＞

5．大学を卒業するまでの全学共通教育（一般教育)、専門教育の全体を通して、次に示す素養をどの程度身につけることができたとお考えですか。以下の項目（1）～（10）のそれぞれに対し、もっともあてはまるものを選択してください。
なお、「わからない」の選択肢は、項目の意味が理解できない、あるいは「身についたかどうかの判断が不能」とお考えの場合にのみ選択してください。

(1) 幅広い教養・知識

(とても身についた／どちらかというと身についた／
どちらかというと身につかなかった／全く身につかなかった／わからない)

(2) 日本語での口頭と筆記によるコミュニケーション能力

(とても身についた／どちらかというと身についた／
どちらかというと身につかなかった／全く身につかなかった／わからない)

(3) 外国語での口頭と筆記によるコミュニケーション能力

(とても身についた／どちらかというと身についた／
どちらかというと身につかなかった／全く身につかなかった／わからない)

(4) 情報リテラシー

(とても身についた／どちらかというと身についた／
どちらかというと身につかなかった／全く身につかなかった／わからない)

（５）市民性

（とても身についた／どちらかというと身についた／
どちらかというと身につかなかった／全く身につかなかった／わからない）

（６）社会性

（とても身についた／どちらかというと身についた／
どちらかというと身につかなかった／全く身につかなかった／わからない）

（７）リーダーシップ

（とても身についた／どちらかというと身についた／
どちらかというと身につかなかった／全く身につかなかった／わからない）

（８）企画力

（とても身についた／どちらかというと身についた／
どちらかというと身につかなかった／全く身につかなかった／わからない）

（９）分析を通しての批判的思考力

（とても身についた／どちらかというと身についた／
どちらかというと身につかなかった／全く身につかなかった／わからない）

（１０）知識を統合し活用する能力

（とても身についた／どちらかというと身についた／
どちらかというと身につかなかった／全く身につかなかった／わからない）

６．全学共通教育（一般教育）において、良い授業として印象に残る授業、逆に、改善の余地が大きいと思われた授業とはどのようなものでしたか。良いと思った、悪いと思った理由について具体的にお答えください。

（適宜、枠が大きくなっても構いません。）

７．卒業生の立場から見て、大阪大学の全学共通教育（一般教育）をより魅力あるものとしていくため、教育の内容・方法をどう改善していけばいいとお考えですか。

（適宜、枠が大きくなっても構いません。）

※ 質問は以上です。ご協力ありがとうございました。当アンケートの結果は、大阪大学の全学共通教育の改善に反映させていく所存です。今後とも、有益なご助言を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。最後に、皆様方の益々のご活躍を期待申し上げます。